

寛永公事乳抄書卷之五

内閣文庫		
番號	和	32983
冊數	10	(8)
函號	150	85

内閣文庫		
架	冊	號
一七	一〇	三二九八三
和	書	類



實承公事記抄書卷一



法華宗不空布施の論

一實承三奉 丙寅九月十日

御臺様御務佐山宗源院殿從一位昌泰大夫入
御他界九月十日不古六日中々備國の僧坊上奉
納經誦經と御少付各法布施と云ふ如く並列
池上の本門寺住持日壽と中山の日慶法布施と
不空身延の目乾因日遠の法布施と受比不空論
起り此と中事實承三丙寅九年九月の御日記也

法華宗不空

一東照宮様流垂示は移りたは河遠列なるこ板と
中不山安及岩の社有り生別當合別院此家中の
向く初念ふと頼比去言信

東照宮様流垂示は移りたは河遠列なるこ板と
の社とも同創(移)あり又慶東河入河以後諸是
於と違ひひて江戸(下)り今の麻布の社地小遷し
初めより今の小祠あり一紙由局民被た山家致る
云々の河竹橋市とあり此造管も今の王く小成り中
實見永正下卯年御日記に月八日のケ案小あり同致
安及岩山一字も石強燒失の中も御日記におあり
一實見永正卯年六月二日御日記のケ案云
河城仙波の南光坊傍に天海高妻申より後堂

和泉寺なる虎の中板一江戸 河城の良忠の忌小

一山と建立し 権願様の河社と建立江戸の
法寺の社小と令急致其申云上は下は此中中見
許由産此付て別和泉寺河社と建立尾法殿
紀伊及水戸殿各河堂一字宛由造管とあり
一同九月御日記云報日上野 権願様神殿の
河多る傳出來別山号と東殿山實見永寺あり同
十七日 河遷宮河堂建立の次第

一 常行堂 尾張大納言殿

一 法苑堂 紀伊大納言殿

此二の堂の号不反掲りけ堂の内也
麻多羅神あり

一 所中社 兼 淨教 淨位所

一 經堂

一 二日月

一 石仏 兼 文珠堂

一 鐘樓 兼 塔

備 大 名 寺 石 塔 燈 寺 進

中 飲 後 堂 和 泉 寺

水 戸 中 細 云 殿

永 井 依 法 寺

塔 丹 波 寺

大 井 大 炊 願

一同年九月御日記晦日横山町辺のち所へ大車抄巻
大風吹日夜二日名消所也指所程焼衣束辺まで
焼男女救多焼死と有り

寛永丁卯年十二月廿六日御日記

一 板倉周防守 系 於 不 昇 於 西 九 江 依 後 依 宗 出 世 の
上 之 西 九 々 依 德 院 殿 之

一 依 宗 出 世 の 依 故 相 國 標 淨 法 度 書 小 ね 曾 漫 小
ね 之 依 宗 出 世 の 依 故 三 条 中 院 之 依 宗 殿 之 依

と 淨 法 度 依 後 出 世 の 者 先 ね 押 入 上 上 念 量 之
由 於 佛 宗 成 下 依 宗 事 備 宗 出 世 の 前 後 淨 法

度 書 小 ね 遠 出 世 の 依 宗 中 院 之 依 宗 執 奏
之 依 宗 三 条 中 院 之 依 宗 事 備 宗 事

一 五 山 依 宗 依 後 西 堂 之 公 依 以 戴 巾 巾 依 之 淨 法
度 書 以 依 宗 依 後 依 宗 事 備 宗 事

一 知 恩 院 執 奏 之 上 人 号 之 事 皆 淨 法 度 書 漫 行
上 人 之 依 宗 依 後 依 宗 事 備 宗 事 依 宗 事 備 宗 事

平定て言はれ奉

一百万通洋苑院墨谷より執奏の者も傳上奉
其後儀不の能化西判の流状と知恩院一持来
中在の小中奉一も知恩院中をて致出世奉

寛永九年七月十九日

寛永九年辰年御日記

一二月十九日 大御所様お是田無致由三可り濃河致
佐中書小出致ケ忠附一死流由外世の後余人名知之
一同市八使永比馬脚同下徳書父子之事をいそし及
對父父子及由及易言はれ有日次父子及和光下徳
及長年近由合徳岳父之國小斗り一張在

神君御他界以後致の中中して今年近致由是
一后下徳之子下徳書之く親父小由是由産出致
一弟及是派一産之由知小去奉由場由是後由使付由
余の大長何とも並傳由是仕之方下徳丁場中り
一系が来由中して一儀が由外由産出付下徳来
一実盤取由中致産後中て子弟由自由中中中
父の儀及由後の中中上由方丸馬脚は下下由
一弟存小由産出有父子及小流最小由使付父比馬
一助之酒井之内小出致遠由六戸江在系小出致
一子下徳書六溝口伯耆書小出致致海一死流
一同日別不豊後書由致易是也

神君御他界以後致の中中て之身不后下子息

軍平と江戸小島宮知り不承て新野川橋平小
て一橋在り是は二車ハ二由所也其衣の理牙由
江右下内官警をて又子た小由追放は任付上力小
軍人仕在り此は豊後守義来小無法新當院流
の名人を上元澤流の長口と令お侍之丹の名人
身の将き事一展風の上小立居去を様小を一中中
信人目成強る程の事多り物方小小名是も之
右支人の領不濃列丹列出割の儀了中由てお上
松平右衛門左衛門久義を又味合右衛門と相流

一 同十二日 大所新様日光江御系信同十六日 日光御系
十七日 日光江 御系信同十六日 日光御系
二條大納言実條中院大納言通村妙法院口跡也

蓮院口信権井口信兼女院使系信同十八日 日光御
系信同亦日 邊所

一 同亦亦日常 於軍様日光江御系信同十八日 日光山
御系亦月朔日 日光江御系信同十八日 日光山

右者 東照宮内十二回所忘小付於日光山
仍供會酒井忠勝奉仍

一 同七月十日 日光地震より御城石垣不々崩是利
一 学校至松切後中出六十二年 以来伏見也今日
大地震より二十二年 以来中も今日大地震 今年
中々也勢と相成り

一 同八月十日 未別於西九殿中井上自平次小目次之恨
ありあり中横目豊徳形於中備自平次と並致教

害比付殿中収る外孫初喜本久丸爲り形跡少備と
組局長督把券付形跡少備も其存在して死す將三日
子形跡於子息之辰由成叙十二歳喜本久丸爲り形跡
と六組局長とも孫存して今死去

一同十二日山口修理父子天野對馬吉見守太久保在系
同日辰由島田由先存も成今同日何とも出仕ぬ
上様御目見

一同十一日六日叙成の別西丸出て由番荒茶良村孫九節
と中人把番於本久在島の本遠之節丸爲りぬ人由之丸
少て切かり中人ぬ人子員今之叙由金橋惣之節と
中とのお存出さぬ丸中一入深子員島田存お存
中より芳村又丸爲り孫九節を組局長中丸孫中惣とあり

けし淋の外殿中孫初信人多く池田喜

一 於本由遠日次茶良村を何とも一塩忠成りて
一ともお存中人ぬ存島一丸お存中とぬお存
少なる今夕孫丸由孫信と中人良又二息存ぬ存
孫九節是と之丸切を中人付節把番荒茶良村と
小孫丸お存ぬ実而中人今由孫九節と之丸を
日多付分大孫丸とつらり初一孫孫孫在島
何とも月八日遠由至小孫丸斗り少て向ひ孫中の
事多ぬ大孫丸も切され孫丸も是は孫喜と
之事諱りして孫九節ハ永井信濃守小由孫成
其後十一月十二日於信濃守宅切後信分 二十歳
信濃守実来流本長他々諸段と孫九節一孫世

亦河内より比叅の産の形名川
たれ永河とのちまはははは

伝濃ち内伝契社田表六条良村遊るの縁分

そしつ六日の夜候の付をうりに西乃御殿さびくと
出まぬとそ世の中ゆまうて人々をしつらつ馬
のをせ遠くをたととらうしつらとそあも打のり
をせみきとそ西条はいま川多く小南人のまよむ
ことしつらつとらつは方彼方の所つらつらつ
次甚高に人のつらつとらつとらつとらつとらつ
うとくさつられ何事やとそ人をあつとらつとらつ
しつらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつ
とらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつ

けあさ人の名をいひのしつらつ

あれそらん免しそめまぬ

としつむ稀打さをきれたしつらつとらつとらつとらつ
うとくは人の名をいひのしつらつとらつとらつとらつ
をしつらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつ
それつらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつ
ゆふとらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつ
さもこれとらん免のをしつらつとらつとらつとらつ
いたれとらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつ
らぬゆふも幸いとそまのありて稀たのしつらつ
あつらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつ
つらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつとらつ

いんげんをうけりて事ありけり
なり今更にわきあはれ人をいも
弟の鶴とありせ竹の馬にのり
見列と一人なれいにいも
ことせ斗りのありていも
いとよそくみえしうのたうとさ
うら孫夕さかひとこころとを
いもよの秋らしとをくらとを
あつらをあらめ枝のををとら
川をわきあつた後香山の産ま
あつらをあらめ枝のををとら
の十日二天のちのちのちのち

乃ぬきさかへりてとんせと
わをれ形えよめと思ひさめ
年とのちいうにらや
まみ夢とあるむ心の
あつたえさうしにありや
少き花と実もむさうら
久みあふ人のあめをさ
こひて恨をむくじ一人
を市にあらしや姓名を
とんとれまみまとのれ
うみうららの恨とむく
れあるをらのうをも
いひりてゆつたを

のいと海なるらんいげらふそのとをあるものためふ
ふしう高となさらんおほやけをたぐをありあふ
おも人もとそ一人もふらめしとわのち事にはやあり
りんくく悲しきうちにとよひと福をらしてえんを
りふ七日たたりぬたとふあとのそわきとをたぐむの
あともらてみまらるる世の境のあにそ神のまのほり
りらと後しそうなるむけしを佛にくあしとたて返
つる相方の浦るこえても指てもわをれうこふ悲
しき世も津島のひよりとをほくわのさあらうのさそ
くらにうらうらさ道のたよりにはなとうたうらさ
ちぢし

夏さひしこり身あらはれあうこの
よのことわりうさうはしあふ

むらけぬさためあふ世のならひとも
あらはうるやうめう神うね
あつれてふことこのわひて世の人の
あをりなるあけさ世あふ
みつここのちとそむる神のよみ
かかく時なきこのにそあふ
誰うせふのをれとわけぬ人やあつと
とふらこたえは多めしあのみや
ぬるあふよたなきのりの力にく
にしむぬぬん人とそあふ

寛永六年乙未月十六日 高昌俊

一同十六日當我又た傳り由加信二百名洋胸とふ良村喧境
の時そそ尾能也存也付也

定

一 於 御城中 自然 火事 之 外 ありし 儀 取 在 御
後 之 外 一切 是 後 系 上 事

一 於 御城 火事 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 又 之 事 御 御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
流 之 事 御 御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の

一 於 御城中 火事 其 外 ありし 儀 取 在 御
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の

一 於 御城中 火事 又 之 外 ありし 儀 取 在 御
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の

寛永六年十一月日

寛永六年十一月日

一 正月 二日 江戸 御城 惣 外 御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の
御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の

御 宣 覺 口 御 未 知 之 時 是 御 番 勤 仕 の

一組 酒井雅樂政

西尾右京

志田伊豆守

志田内記

一組 志田内記

一組 大井大炊政

依久同日向守

本多大隅

松平常女

一組 酒井儀政守

一組 酒井儀政守

稻葉丹後守

酒井河波守

細川玄蕃政

志田河内守

志田年人

堀内儀守

依久右大膳

松平玄蕃

清野常女

安後右京

井伊兵部少輔

酒井山城守

新庄澄河守

一組 永井儀政守

一組 永井儀政守

秋元佐馬守

井上河内守

内後百助

小笠原政通守

一組 松平或政守

一組 松平或政守

西郷若狭守

牧野右守

内後伊賀守

水野元膳

喜山太左

系極左膳

水谷伊勢守

秋田河内守

松平大膳

水谷伊勢守

秋田河内守

松平大膳

日根野武於

皆川志摩子也

一組五夫平兵衛也

大岡右衛門

内後記子也

大方孝之節

明漢兵衛也

相馬長門守

大之保加賀也

一或後世方之亦武百指也

孝金仙臺中納言

上松彈正

鳥井伊賀也

依竹左衛門也

岩城忠治也

仙千代也

酒井之内南

酒井長門守

酒井右近

坂丹後守

松平伊豫也

松平出羽也

松平大和也

松平大依也

中多飛彈也

水戸中納言

加茂北後也

清和但馬也

溝口出雲也

溝口伊賀也

南於信濃也

戸沢右京

六ヶ其庫也

以上

以上

以上

以上

一江戸石見也 久永源三郎

森川合左衛門

駒井三浦也

池田忠重

小俣左兵衛也

石野六右衛門

中野長三郎

天野左右衛門

一 伊豆石原 俵後 伊豆石原

長尾中丸寺

小倉忠右衛門

一 伊豆石原 向井 向井 向井

今村 今村

一 伊豆石原 同文 同文

山田 山田

一 伊豆石原 小澤 小澤

若田 若田

一 三河大石 中 中

一 遠州流之内 中 中

一 伊豆流之内 中 中

大久保新八

中沢 中沢

石川 石川

喜多 喜多

石川 石川

中 中

中 中

中 中

一 播磨流 伊豆流 中

一 又 伊豆流 中

一 近江流 中

一 又 濃流 中

又 中 又 中

一 六拾五万九千五百石

尾張大納言

内 播磨石原 伊豆流 但二葉市城守 伊豆流

一 又 播磨石原 中

紀伊大納言

内 十萬石 但二葉市城守 伊豆流

一 又 拾五万石

駿河大納言

内 播磨石原 伊豆流 伊豆流

本宮の二百に拾貳万に子二百九拾六の本年

二推万九千に百お推万
此後三引
此書後引
二推二万二千五

寛永六年二月十七日上野東殿山

御遣書初て御書後二月十五日

御月札のききたる通

一上野東殿山に 御城の鬼門小町より中州竹で天海

大信正と夜堂和泉寺波お後達上野上野の向

の長を擗して 御宮と建之 権現様を奉

御清御連枝何とも法堂由建之をく宛といふとも

於小 相同様 古徳後也 御書後三々より天海大

信正取り小中上小付己の二月十日小上野の

御宮之書十七日小御書後三々中州竹由伴波

河度水戸度之十七日夜七つる小波河度水戸度上野の

書後河度由伴波大炊政永井信徳等何とも

長袴少く書後河度一系は附日の由小

相同様御成堂の書少く波河度水戸度御目見

相同様書後河度入御書後由目見物此書尾澤及物法苑

堂入御書後御目見物此書尾澤及又より輪云此書尾澤及

此目見物とれより由なる書後小下信正方には入御書後の

小書院少く御眼上由伴波河度水戸度御眼水

戸度の向小信正御書後御目見物二軒並み御目見

有目三軒の御書後御目見物二軒並み御書後御目見

御眼より由なる御書後御目見物二階の下の小書

又の産 相国様御覽に成渡河及水産及御見物
御宴へ由儀御見物に私泉等より御宴へ松原へ
御成由能知記書之かこひに御宴ありけし
由儀 相国様御成河及水産及御見物
御成由能知記書之かこひに御宴ありけし
二秋由能知記書之かこひに御宴ありけし
私泉等沈碑仕出て矣（おん）由能知記書之かこひに御宴ありけし
相国様御成河及水産及御見物
多り天海傍に流り今地院御成河及水産及御見物
勝子入御成河長橋石之傍子通表出御成
御成御見物由能知記書之かこひに御宴ありけし

一同年に月十二日 將軍様 大猷院御成河及水産及御見物

日岩御成河及水産及御見物
御成十七日御成河及水産及御見物

一同年六月十七日 將軍様上野南光坊御成河及水産及御見物

御成河及水産及御見物
御成河及水産及御見物
御成河及水産及御見物

御日記同日のケ条

一尚己年表の中を江戸中流より白雲寺人を
切中事いづくといふ教を忘らぬ日若くは
所中事も人を切を解更中物五中も何ら大
形切格より老若をいづくは千人切といふ

山も此後奥御城の内山の丸の御口先少ても
切中此徳人性来侍合大督少て道をも有り中
比傳之御成夜書出

必安人少切少忠おき少て其屋敷受る者お合何方近も
近を苗室刀根長と取子細をおる侍少不人
臣進少人少美刀根長出少苗少少てお教少
ても不若衣る忠進を此何の先少の屋敷受るも
急度出合て苗室者之物と急度少から臣屋敷
の若少人少切少事少知少おる少の少臣浦の
苗少少たる人少との少

寛永六年己六月廿日

一同奉七月廿七日大徳寺の傳玉室法庵妙如と
の傳枕源卓傳は人死流法庵の相列上の山玉
室より奥の赤飯桃源の津恒卓傳を世利へ
出教有り是ハ左に寛永己年七月板合周防也
下向の御は傳知御成夜書之紙表紙あり少
知大徳寺の法庵玉室は月妙如なる桃源卓
傳二人は祈願中上少大徳妙をあるの傳お十
末後少て出世用當は事及之候少法夜く旨少
お遠の程少少の更少名取少人少修行少新
り少門中お初一山評定同少仕候奉候候
お相 禁中へ令奏少其日少御持入院の候
長傳出此奉先例少少少省少中又系禪

徳行二十一年一千七百別の後三枚遠方の中は約
是より案文と相違を在る目如仁あ書内にて中
大脚小千七百と中足九百六十二人出立し
外より長年あり云々傳記云々は昔より傳
来し通小勅事の方以弟の出世開業仕り給ふ
伝付ては中法後書以後の出世お押へ年々
ては伝付後後送感中達るは再征中としとも
御免許云々は内大徳寺龍光院の江戸の何
小も上を以て中上殘世人の骨上を自分
の御許証中上は事曲事小も思はれ給ふは
記流大徳寺のお世向後撰養云用の中傳養
一應之は傳付は内法后の但列出石の入さ山小山

宗維一首の歌を送る
宗維とて同園をとりとも宗門の浮院は遊
て尚月々江戸へ下り中法中上柳生祖る
宗維一首の歌を送る

たのむ入や思ひ入るあや海をこ
うきいそめとぬ浮世くりり

返り

しらくにもおのたくの入さや海を

う世のさうこそあまらうた

法后玉室好漢海及追同及玉室の内後豊
前書小中法中右同宗不列と法后の古波山城
小中法上の山へ行く玉室を極念之部離の詩
河り果て

一同年九月十日卯別京清水寺を上方中一宮
も名残の申上り中あり

一同年十月十七日御日記

今地院山宗傳長老本光國師ハ

権現様の御代ハお法在江戶山崎及遠小

御成三由在江戶十月十七日

相國様今地院ハ

御成三由中十六日お法在江戶お法在江戶及遠小

和泉寺之花園お法在江戶 御社系を

一同年十月十日

今上皇帝御脱履御祿分あり

いさゝ事のなきを御やとくおとせ

いさゝとまをともたけくらぬ所を

御代継の左子と云はれお法在江戶及遠小

院宮也女帝先例由是御代中一の御實白皇
右子小はお法在江戶及遠小

私に学授實を松お法在江戶及遠小女帝之稱徳天皇は

来久及絶く之由在江戶及遠小又お法在江戶及遠小

の弄持之首の唐人日本と東海姫氏と云

にも書は天照右神文と初神切皇后依女神也

たあさし由事之を後母明持統稱徳皆ありて

女帝之来代小むて不固女帝由是江戶及遠小

氏國の由る久しと物徳也

寛永七庚午年御日記

二月十日於酒井新樂院宅會の御法苑宗
身延上人日還と池上の上人日樹と對御也

々酒井雅重次同譜波弓稲妻丹後守内蔵守
賢守融元天海信玄金地院土師道春 永吉
黒子仙名守也

右不堂不施の傳々日樹の作妙光寺の日真於
大坂不更不施の牧候と申立京中一宗の徳寺
と及向長山法元日真不真令死流之後非たの大
教の附象 御免法海り實子日樹小程不更不施
の候と申立させ去れ實永三年 山宗源院殿御吊
の附日樹御布施と不更不施と更不事と
あき小憩りて御延へ系譜をらるゝの願獄の人と
申ひらめ一味日公の同信男女申らけ候と候と傳々
去来不更不施日還指御法信討傳 御信書々々

右の法傳去来不更不施と扱りのとて日樹御用
日樹兼中山の日賢中村の日元碑文谷の日進平
賀の日弘一人一味身延の日進兼法信日乾同日
遠玉沃の日進兼東の日東之松の日長一人一味
今日及討論去れ慶長三年十月於大坂御殿不更
不施の傳々々々其附日真不真令死流せしめ今
まじ實子の日樹同事と申立此後曲事申すに經
文兼天台妙樂傳教の釋祖師の立候と云ふは兼
の考進の法信文元弘三年五月十三日と申立一々
永吉法信と日樹方の云々存候の存候法信と云々
何ら其上先年 檀越様先非と申候傳々々々
て日真不更不施板倉守御守日真方(祖師)以

朱の割法は白先親の例の中送折紙と申折紙と
出〜日連もはる流最日自死流却る西目ありと
中日選日遠ち胸の依中表也といひ院文敷を初と
そ上日自許免は後先非と正後悔の依あり
非たの太級中々監職人も許免也日自一人の事
何れは百年朱の祖師の経釈の文義も相迫
代系邪不司代の文書も宗風をて之也言は返
善中及日樹今日中風守友及對後と申永
く云残み人て多中申人同口物両方退
其後一月程有りて日自を衣と取對馬廻り死流
日樹を依は伊予に死流強り人遊放日自
子伯は院日樹伊予長遠院に二人の折表在

少く流最の内よは入

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一池上日樹今夜中上日自死流却る西目ありと

一日自侯の伊賀守清佐云申上は自以清意也
清意も此に出流今夏法中人とて

権現様清樹の旨と又波遠有石史石施の候日樹
お中より世書物以下お波再托之度列る由事
此史云は自侯の宛先家由家名を割取討之
流最は候付事

寛永七年四月二日

同日七月八日御日記

禪宗洞家の大中と永平と流最大中との越後
永平との伊勢へ出流在大中と天南の原松葉
岡東云乃の法向悟也 権現様清樹代より
大中との中より候付事 寛永七年大中と

之と云洞家の仕立を中付る也今之天南と法
向より乃の名入流傍之強ニと云はるは在創
原在大中との在江戸也物々永平と近年波
遠居大中とを永平と之移して市内に約あり
其何年禪宗お世の波流永平と云て斗り
出世して候付事お世之用を中付るは云
物云と大徳も取流の流出世の候お遠由最科
此何付洞家にも列案の候も云はるは候
惣持ち出世清法波は候付永平と斗り出世
仕立御意より中付るは流の清法波書と謀書
し候付事 此中より近年惣持ち出世の
元を御し永平と云て又お世仕立と能中候

たき入らるる出家流逆惑の中御所中御付侍
給儀申渡大申与永年与偽形とて罪科小
御付侍

一同年六月廿一日大地震天より毛好

一同年七月廿日織田常三郎去七年之御時

一同日御日記澄河及駿河之徳也流絶也此打
り御所は信州の長あ方一也方年り此は作大鳥
と流あつけり 大御不様此上は御所の大
とく歳もあそ此方名は流あそ此

一同年十月九日夜堂和泉守言自尻卒ス七十五号
寒松院高山道賢信都

一同日御日記

佐和守相忠雄家来の者の事小付て安後浪路
の阿部也御み御久世三也御とあ思儀ある事
出給は是ハ守相家来河合本は馬つ子又も御
と同家中渡辺政馬身源左御と喧嘩の事小
起りけ流の中合お成は甚子細は主頭佐和の
城中小風流あるおとり河り見物せんとい侍たの
子佐大方家をゆて集る渡辺政馬女子たま
ゆく苗中の中も二も御御小言身源左御と中老
礼をいそし川麓尾居中御付見物小島集しとく
宿おをとり張をいそ河合又も御と中老あり
お切中の殺馬流りのお行者遠山は吉清と中
老あり合は又も御をのり遊かけ流あそり

此考成を人打箇中此を附見の殺馬海りゆく
又此節又申され其の方へ使をたたく箇事三人の更
押辺程なきのいそぐや侍の中主ふ河らる
る是漸押辺打吊る一市中是は小より家老を
の制さすも名お成江戸中誠宰相一申遠は
ゆか江戸より申され其の小侍一人は源江戸を
市中中より申され其の八代御といふものを
江戸宰相方へをいふ小安及次右門河原中
お節日次申され其の小目とかけゆ方何とせし
助成存宰相会身と頼中誠申され其の喧
の中人少くなく申され其の申すは申す人又
お節近國小法在ゆ方石等か一切扱ひさせ

市中中より取扱久世に御も加り市中申す宰相
合息は致ゆゆを申され其の病者小申すは
取中夜ゆるせん二人連判の子形仕後取市中
お海扱子形とを申され其の申すは取中此目
安及次右門の向番申判形申仕ゆる御日刊
形させ市中中此節お節申すは申され其の申すは
日次右門の中此の事向番申すは申され其の判形の候
初より合息申すは申すは申すは返言いませ
申すは申され其の申すは申すは申すは返言いませ
一法成る申すは申すは申すは申すは申すは申すは
達し申すは申すは申すは申すは申すは申すは

一同年十二月十二日地震

一同月廿二日大地震辰戌刻光物飛り大倉河り

寛永八年未年正月御日記

正月廿日松田太助湯浴水野傳花清原大坂の狭

地大坂は伝符同次武指人大坂は
役の初

一同年二月廿日内蔵書政教年日儀の事とも
辛り由政易

一同月八日内蔵外記小倉重知行と下子息は前
丸湯の中印記今迄の細行はる

一同年三月十六日申多能合多儀列由て去る万石
由加増小倉之系を彼書三列由て或万石洋欣

一同月十九日印戸申小原路同古日申分路又徳國

の行自りれさる

一同年四月二日淺弟守を上

一同日御日記渡河大納言及回々より湯家来流
殺多由手打由成重科も由由此知小曆くの
傳殺十人由成叙成此付 大御新様由初由

成此甲列由此新指成中此初由

一同年五月廿日日光御宮御遠宮守由依後
初右馬の長勝半此馬の守傳小村彦由命也

一同日 將軍様天地危と申大取小石由御海高
河り大井大炊政以下御碎平御御機嫌由清此

一同月下旬より西丸様右徳院様御病氣此由重く
成此元七月十七日印番山の御宮之御由信此

此とも津の介由難儀の津根押詰人等詳由依
の面々難うござり

一西九様津病氣近日津難儀由医者雇入久志等
戎形去治通仙道安之臣人少てお後津業洞合
中此と少く津物次第小強く由痛津更何とと
此等を成儀と申す

一紀伊大納言及高村由在國少く由國小由在比とも
大津新様由氣分と申すは成急小由國小由下向
は成修り道中由急きと云候由下り由依の成も
は成修り傳即人由少く候或人半由依中由田系
まて由下向は成町よりおく候とて織田と申材小
は成由新江戸(由依の成と申)使者由津上りは成

由系勤之儀方由是依由方由小由
大津新様由公元々く由是是まて由下向の中
由上此の事く由戸(由越之由中) 上三由新様
由系府あり

一同年十二月十二日申多由大隅守在石坂の本(系
り由石小治次由系橋おおわく、家来大脚大隅守を
由是實中此是ハ大隅守目次おわらき人少く
かしの知中、家来殺多由成紋中付由お付て在の
大脚と申すとの由の知中、比お付て存て之由
實中此別依の者大脚を成紋仕由大隅守手
く由是比申す候死去に十六

寛永公事記抄書卷之三



